〈学術的読み物〉

これから「保育者」をめざす　あなたに
～保育について～

村　田　陽　子
東亜大学　人間科学部　人間社会学科　子ども発達コース
e-mail:murata@toua-u.ac.jp

はじめに

東亜大学人間科学部の「子ども発達コース」では，保育士・幼稚園教諭の免許が取得できます。[1] このコースは，生きる力の基礎となる“子どもの心を支える”ことのできる保育力のある保育士・教員の養成に力を注いでいます。それでは「保育力のある保育士・幼稚園教諭」とはどのような人でしょうか。ここでは，保育士・幼稚園教諭の仕事に少しでも興味のあるみなさんを念頭に置きながら，このことを説明したいと思います。保育士の仕事を具体的に紹介しながら書きますので，将来，保育士を目指してみたいと考えているみなさんは是非，読んでみてください。まず「保育」ということばの説明から始めましょう。

保育とは

日本では，年齢の低い乳幼児を対象とした教育を「保育」といい，乳幼児を教育する先生のことを「保育者」といいます。なぜ「乳幼児教育」ではなく「保育」というのでしょうか。それは，６歳以上の小学校の児童生徒を対象とした教育と，０歳～６歳までの年齢の子どもを対象とした教育の内容が大いに異なり，「教育」では，そうした低年齢の子どもの教育について十分に言いつくすことができないからです。

日本に初めて幼稚園が登場したのは1876（明治９）年のことで，東京女子師範学校（現，お茶の水女子大学）に附属幼稚園が開設されたときです。この時すでに「保育法の議」という規則が定められていて，そこで「保育」という言葉が用いられています。これは公的なものとしては，日本で最初のものであるといわれています。それ以来「保育」は，幼児期の教育を示す言葉として一般に使われてきました。

日本における保育の基礎を築き，保育の理論的な指導者である倉橋惣三（1882～1955）は，児童心理学者として長年，東京女子師範学校附属幼稚園の主事を務めた人物ですが，戦後，学校教育法（1947年３月）が制定された当時，「幼稚園には，教育だけでなく，年齢的にケヤー〔ケアcare〕や世話をして育てることが必要である」と述べています。さらに，「教育は人間的接触なしに出発しない。そして相手が幼児だからケヤーなしには人間的な接触はできない―世話なしに教育する可能性はない」と論じています。[2]

保育を一般的に定義すると，保育所や幼稚園などの社会的施設で，専門家である指導者（保育者）の下で営まれる，乳幼児を対象とした教育ということができます。これは子どもを健やかに育てる営みであり，子どもが心豊かに，人間らしく育つように保護し，子どもが自ら育とうとするのをサポートする仕事といえます。乳幼児の教育を行うのですから，そこには「養護しながら・保護しながら」「教育する」といった意味合いがあります。

幼児の教育すなわち「保育」の特徴は，環境を通して行う点にあります。これは，幼児が，自分の興味のある物（物的環境）や人（人的環境）にかかわって，「遊び」や「活動」を生み出していくからです。幼児は「遊び」や「活動」を通して，また遊びとは違う「生活」を通しても，さまざまな経験をし，学習をします。幼児は，今やりたいこと，実現したいことに向かっていき，その実現によって充実感や満足感を得ます。この過程で幼

児は，いろいろなことを思ったり，感じたり，考えたり，理解したりします。またいろいろと心情的な働きをめぐらせたりします。こうした経験を重ねることによって，子どもはどんどん発達していくのです。

保育所や幼稚園の先生の大きな役割は，子どもの心・心情の安定が満たされるようにすることにあります。そのため保育者は，適切な環境を用意し，配慮しながら見守り，必要に応じて支援や援助をすることになります。保育所や幼稚園で展開される「遊び」や「活動」「生活」の内容すべてを「保育内容」といいます。次に具体的な「保育内容」をみてみましょう。私はかつて保育者として，Ｙ大学教育学部附属幼稚園で子どもたちと向き合った経験がありますので，そのときの記録（「幼稚園での子どもたちの生活」）を紹介しようと思います。

Ｙ大学教育学部附属幼稚園では，保育を終えると，短時間に子どもたちの遊びや動きを簡単に図式的に書き，全教官が集まって、きょうの子どもたちの遊びの様子を話し合っています。「きょうの活動をどうやって明日につなげるか」，「いま，何に気づかせ，何をどのようにして子どもたちに経験させればよいのか」，そのために「保育者は，どのような手だてや援助をどこでどうしていけばよいのか」などです。また，「明日の保育の環境づくりは，何をどこへどのように置き，何を除けばよいのか」という問題も話し合います。数々の壁にぶつかり，試行錯誤しながらも，考え合い，お互いに共通理解し合いながら，子どもたちが充実した遊びを展開することが出来るようにと，附属幼稚園の全教官が力を合わせ，明日に向かって保育の準備をしています。なおこの保育記録は，1987年９月28日（月曜日）の，３歳児の１日の生活記録です。

保育の実際「幼稚園での子どもたちの生活」

朝，先生たちが各保育室や遊戯室，運動場，あちこちのテラスや庭などを見回り，きょうも子どもたちが遊びたい場へ思い思いに入って行き，そこで一生懸命遊べるようにと，土曜日にしまった運動，木工，砂場，土粘土，ままごと，描画等の用具を子どもたちが出しやすいようにする。野菜もままごと用具のそばに置く。

各保育室では，子どもたちの姿から，遊びの場つくりをしたり，子どもの要求に応え，すぐ出せるようにと考えた物を準備したりする。

朝礼を終え，８時40分頃幼稚園の玄関を開けると，子どもたちのにぎやかな声が流れる。

子どもたちは，父親や母親，祖父母たちなどの保護者と一緒にペチュニアやベゴニアの花が咲き誇っているプランターの並んでいる廊下を通り，保育室へ入って行く。保育室では，子どもと保護者と保育者とで朝の挨拶を交わす。ここから子どもたちの園生活の一日が始まる。出席シールを貼り，遊び着に着替え，持ち物を始末すると，子どもたちは自分のやりたい遊びに入っていく。

３歳児学級（年少すみれ組）では，一番早く登園したＲ男が「山へ行った」と元気に話しながら，どんぐりと椎の実を入れたビニール袋を鞄から出して見せる。次に登園したＡ子も「Ｉ公園でどんぐり拾った」と小さいバスケットを開いて見せる。

私が四角の容器を机の上に出すと，Ｒ男とＡ子はその中へどんぐりをいれ，「緑色」「茶色」「これは帽子をかぶってる」「帽子をかぶってない」などと話しながらどんぐりを触って遊ぶ。登園した子どもたちは次々にどんぐりに目を向ける。「どんぐりどこにあったの？」と尋ねながら触ったり握ったりする。ヤクルト容器や小箱の中にどんぐりを入れ振ってみるなど，どんぐりとのいろいろな関わりが見られる。私は，油粘土を出し，手で丸く丸めてから押し，平らな円形を作る。そしてその円形の粘土の縁に沿って，どんぐりを並べ，飾ろうと一つ，二つ，三つ目を並べたところでＡ子が，「私がする」「ケーキつくる」と言ってその粘土を自分の前に置き，飾り始める。朝の仕事を終えた子どもたちが次々に粘土を丸めたり，伸ばしたり，切ったり，どんぐりを使って飾ったりする。私が裏庭から葉っぱの沢山ついている枝草を取って来て，そっと机の上に置く。すると子どもたちは葉っぱをちぎり，葉っぱの上へケーキや飴を載せる。作ることには参加していないＳ男が「わぁー，きれいなケーキだ！」と言い，近くにある卓上積み木を床に並べる。「ケーキ屋さんでーす」「お金を持って買いに来てー」と，積み木

で店を作りながら叫ぶ。すぐ側でＢブロックの鉄砲を作っていたＴ男が，店づくりを手伝う。女の子たちは，ケーキを店に並べる。周りにいる子どもたちと私は，お金づくりに忙しくなる。紙のお金ができると「ごめんください」と，買いに行く。Ｓ男は,「いらっしゃい」と売る人になり，お金をもらって積み木の下へしまう。子どもたちの売り買いは，出たり入ったりして役を替わりながら30分間くらい続く。

このような保育室の中にも，畳の上では，色紙や粘土でごちそうをつくり，人形をおんぶしてのままごと遊び，また,「鉢に種が落ちていた」と言って，朝顔の種入れ袋を，紙を折り曲げセロハンテープでくっつけ，鉛筆で絵を描いて作って種を入れている子,廃材をセロハンテープでくっつけ,作りたい物を自分の思いや考えで作っている子どもなどいる。

保育室の前の砂場では，３人の男の子たちが砂山を作り,トンネルを作っていたが,そのうち「工事」と言ってパイプを砂の中へ埋めたり，出したり，水を流し，うまく流れなければまたパイプを動かし砂で少し傾斜を作ったり，つなぎ目を離れないよう引っ張ったり，パイプを立てたりと，いろいろ試みながら水の流れを考えている。

ポスターカラーの場では，他の遊びを終えたすみれ組の子どもたちは，年中ゆり組の子どもたちの描いている側で描き始める。

年長・年中児たちと遊戯室でボールを投げたり，迷路の大型箱積み木を歩いたりして遊んでいたＹ男は,「先生！　運動場で赤い玉投げてるよ」と私のところへ言って来る。

私は「玉入れしてるのかな」と言い，私の周りにいた子どもたちと運動場へ行く。

そこでは年長児の笛の合図で紅白の玉入れが始まり，テープレコーダーから〔マンガ〕「聖闘士（セイント）星矢（セイヤ）」の曲が流れ，年長児と年中児が入り交じって玉を投げている。そこへ年少児も数人私と一緒に加わる。年長児はまた笛を鳴らし，テープも止める。そこで玉入れは終わる。一人の年長児の女の子と私とで玉を投げて玉の数を数える。周りの子どもたちも大きな声で一緒に数える。

そこへ年長さくら組の男の子が,「すみれさん！狩人が出来たから劇をするよ」「見においで」と誘いに来る。土曜日にOHP〔オーバーヘッドプロジェクタ〕を使って劇を見せてくれたが，狩人が出来ていなかったので「赤ずきん」の劇は途中で終わっていた。「今度また，狩人を作って見せてあげる」とすみれ組に約束していた。それを忘れず,朝から今まで時間をかけて作ったのであろう。

OHP用の登場人物は，厚紙で形を切り抜き，切り抜いた所に色セロファン紙を貼る。OHPで映すと，きれいに色が映し出されるよう考えている。OHPの劇が始まる前には，あちこちで遊んでいたすみれ組の子どもたちはほとんど集まり，他のクラスの子どもたちと一緒に静かに劇を見る。

その年長保育室のテラスでは，６人の男女児がバス旅行した時のバスの絵や友達の絵を描いている。隣の年中きく組保育室でも廃材を用いて作ったり，切ったり，貼ったりしている。そしてカラーケーキを出して描いている姿も見られる。

またニワトリ小屋や近くの庭では，年長もも組の子どもたちがニワトリに餌をあげたり，抱っこしたり，ニワトリを囲んでおしゃべりしたりしている。そしてニワトリを描きたくなった子どもたちは，先生と描く場をつくり，ポスターカラーでニワトリを描き始める。

もも組と管理棟の間の庭では，一角にござやサークルを用いて家をつくり，テーブルを置き，お母さん，お姉さん役になって，キャベツやニンジン，花びら，砂，水を用いて料理を作り，きれいに盛りつけているきく組女の子たちの姿，そしてそのすぐ近くで昆虫かごを持ち,植木鉢を動かし,虫探しに懸命になっている年長男児の姿も見える。

玄関ホールのじゅうたんに座り込み，静かに絵本を見ている５人の姿もある。

まだまだ築山で〔光戦隊〕マスクマンごっこをしたり，池で魚釣りをしたり，いろいろな固定遊具で遊んでいる子どもたちもいる。

すみれ組は片付けて帰る支度をしなくてはと，子どもたちを保育室へ集めたが,「車をつくってからね」と，Ｂブロックで車を作りだす子もいる。

帰り支度を終え，静かに紙芝居を見て，遊んだことを話したり，歌を歌ったりして，落ち着いたところで子どもたちは，保育室を出て行く。

玄関でまた子どもたちを保護者へ渡す。それぞれ親子で私に挨拶をして帰って行く。

幼児教育コース以外の他コースの学生たちの感想文

次に，この私の記録を学生たちが読んで書いた感想を紹介しようと思います。この感想文は，私が以前から非常勤講師として勤務しているＹ大学教育学部２年生の学生が書いたものです。Ｙ大学教育学部では，幼児教育コースの３年次に附属幼稚園で教育実習をします。そして後輩の幼児教育コース２年生がその様子を参観実習します。ある日，たまたまこの参観実習の日と私の授業とが重なりました。そこで私は，参観実習にも入れず，附属幼稚園の様子も知らない幼児教育コース以外の学生に，課題として感想文を書いてもらうことにしたのです。つまり他コースの学生が書いた感想文ですから，これから保育士を目指そうと思っているみなさんにとってもきっと参考になると思います。紙面の都合上，３名分だけを紹介します。

〔男子学生Ｕ〕

今回「幼稚園での子どもたちの生活」を読んで，実際の幼稚園の様子を知ることができた。また，子どもにとっての「遊び」がどのような働きを持ち，それをどのように子どもが生活の中に取り入れているのか，まだまだ理解していない部分も多いが，いろいろ知ることができたように思う。

現場では，子どもが自分の好きなところで思い切って遊べるように，また，子どもの要求にすぐに応じることが出来るように，環境が整えられている。登園して来た子どもたちが，自分の体験してきたことを保育者に話すことで人とのコミュニケーションを持ち，そこからだんだんと遊びに発展していくことができるのだ。

今回の記録の中では，「どんぐり」が出てきたが，私の中ではどんぐりというものの使用方法はそんなにも多くないが，子どもにとってのどんぐりは何にでもなることができるのだなと感じた。また，それは子ども一人ひとりによっても異なり，私達では思いつかないようなアイデアも生まれてくるのではないかと思った。どんぐりを使ってケーキを作る部分では，「保育者が裏庭から葉っぱを取って来，そっと机の上に置く」と書いてあるが，子どもに直接「この葉っぱをこういう風に使えばいいよ。」と働きかけるのではなく，子どもたちが自由に発想できるように，またその方法に気づくように導いているように感じた。この部分で一番印象に残ったのは，子どもたちは，どんぐりという身近にあるものを使って，それを集めるだけでなく遊びに発展させることが出来るということである。どんぐりからごっこ遊びに発展させることは私にとっては思いつかないことだ。砂場の出来事であっても，最初の子どもたちの遊びは決して「工事」ではなかったが，何かをきっかけに自分たちがやっている遊びがまるで「工事」のようだという事に気づき，そこからまた新たな遊びが始まっていくのだ。子どもは遊びを次々と発展させることができるのだ。

子どもたちの一日の生活の中には，様々な出会いや遊びがある。その遊びひとつひとつは，子どもたちにとっては，大切な意味のある遊びなのだ。その遊びひとつひとつには，ちゃんと課題や目的があり，それに向かって必要なものを選び出し，取りかかる。子どもたちは気づかないうちに遊びを通して，多くのことを学び獲得しているのだ。このことから，子どもたちにとっての「遊び」は，私たちにとっての「勉強」と似ているのではないかと思った。しかし異なっている点は，私達は勉強しようと思ってある課題に取り組んでいるが，子どもたちはそうではなく，「遊び」の中で無意識のうちに自然と課題に向かって取り組み学んでいるという点であろう。その中で知識が増えていったり，感性などが育まれていくのではなかろうかと思った。

そしてそれは，今まで出来なかったことが出来るようになったことの喜びであったり，自信につながるものであったりするのかもしれない。子どもたちにとっての自信というものは，とても大切なものである。子どもの中でも小学校高学年などでしか見られないのかもしれないが，何かに対して自信を持てずにいると，失敗することを怖がり自分から働きかけることをしなくなってしまう。自信と子どもの自主性には大きな関係があるのではないだろうか。自信を持っていることで，様々なことに自ら取り組もうとすることができるのではないか。

子どもの様々なことへ主体的に取り組もうとする生活ぶりそのものが，活動の基盤となり，遊び

は子どもの中でとても重要な働きをしている。その生活を充実させるために保育者は，子どもたちの学びの場である遊びを，子どもたちがおもいっきり楽しむことができ，遊びを様々な形に発展させることができるように，日々保育の準備をし，環境の整備，環境づくりをしているのだ。そして保育者は，子どもの姿やちょっとした行動にも気を配り，子どもが多くのことを経験し学べるよう，援助していかなければならないこと，などを感じることができた。

〔女子学生Ｓ〕

私は，「幼稚園での子どもたちの生活」を読み，遊びの重要性や保育者の役割，などを知ることが出来た。そこで，私がこの資料から気づかされたこと，知ることが出来たこと，学んだことなどを述べていくことにする。

先ず学んだことは，「子どもにとって遊びは重要な学びの場である」ということである。例えば，子どもがどんぐりを持って来たことから始まったケーキ屋さんごっこでは，大人の世界を真似することによって，お金のことや売り買いという仕組みを学ぶことが出来ている。また，廃材を使って作りたいものを作って遊んでいる子どもは，発想力を伸ばしたり，指を細かく動かす練習になったりしている。砂場で，砂山をつくりトンネルをつくっていた子どもたちは，友達と協力することを学び，どうすれば水は流れるのかと試行錯誤で水の流れを学んでいる。昆虫かごを持ち，虫探しをしている子どもは，虫の名前を知る機会となり，生き物について学ぶことができている。

このように，子どもたちは遊びを通して様々なことを学んでいる。私は遊びというものは，学びの場であり，活動の基盤となることを知ることができた。そして，遊びの重要性というものを改めて感じた。

次に学んだのは，保育者の援助についてである。前文でも述べたように，遊びは重要な活動であるが，それが子どもにとって充実したものになるかは，保育者にかかっているのだと知った。例えば，朝保育者は園全体を見回り，子どもたちが遊びやすいように準備をしている。また，どんぐりに興味を示している子どもに対して，保育者は油粘土を出して来たり，葉っぱを出して来たりしている。お店ごっこを始めた子どもたちに対しては，お金を一緒に作っている。ニワトリを描こうとしている子どもに対しては，描く場を子どもたちと一緒につくっている。

保育者は，環境作りから始まり，子どもたちの遊びがより発展したものになるように考え，援助していく必要があることを知った。また，適切な援助をするために，保育者は，子どもたち一人ひとりに目を向け，子どもたちの気持ちをよく理解する必要があり，子どもたち一人ひとりのことをよく理解し，知っておく必要があることを改めて感じた。

最後に学んだのは，今日を振り返る必要性である。振り返るとは例えば，保育者が子どもたちの帰った後も，子どものことや保育について記録を書いたり，全教官で話し合いをすることである。

保育者は，今日を振り返り，子どもたちに何を今後学ばせたいか考え，それに対して準備することを考えていかなければならないのだと知ることができた。

また，振り返る時に，他の教官との情報交換も重要であることを学んだ。一人ひとりの子どもに，目を向け，明日につなげるために，今日を振り返り反省することは大変重要なことなのだと改めて感じた。

私はこの資料を読み，遊びの重要性を学んだ。またその遊びを充実させるための保育者の役割も学ぶことができた。この学んだことを今後の授業や教育実習に活かしていきたいと感じている。

〔女子学生Ｎ〕

今回このプリントを読んで，幼稚園での子どもたちの生活について，詳しく細かく知ることができました。その中で，感じたことが多々ありました。

１つめは，朝，保育者が子どもたちが遊びやすいように遊具を整備したり，玩具を配置するということです。前にこのような話は聴いたことはありましたが，子どもの姿を想像し，子どもの要求に応じた準備をすることの重要さを改めて感じました。

子どもを保護者から預かる保育者として，最も

注意を向けなければならないのは，子どもの安全だと思います。子どもが安全で快適に過ごすことのできる場を作るために，子どものことを第一に考えた準備をしなくてはいけないのだと強く感じました。

２つめは，子どもの遊びの展開の多さに驚きました。子どもたちがすぐに集まり，ひとつの遊びを一緒に楽しむことができたり，あるひとつの遊びからどんどんといろいろな遊びへと発展させたりと，子どもたちは本当に遊びの天才だなー，と感じました。また，保育者が子どもの興味を引き出すものを提示してみることもとても大切なことだと思いました。ただ子どもたちの遊びを見守るだけでなく，子どもたちの遊びを援助することも重要な保育者の役割であると感じました。そのことで，子どもたちが新しい発見をしたり，新たに自分の考えを膨らませることができたりする機会が増えていくと思います。保育者自身が子どもたちの遊びに積極的に参加していくことも，子どもたちの自信へとつながっていくと感じました。もし，自分の考えた遊びにみんなが参加してくれて，みんなが楽しんでくれていると感じると，とても嬉しい気持ちになり，自分自身も遊びに対して楽しめると思います。そうやって自分に自信をつけていったり，周りの友達との遊び方，関わり方などを身につけていくのだと思います。

遊びは子どもたちにとって，成長・発達の場であり，生活や社会の中での，様々なことを身に付けていくもの，学習していくものとして，必要不可欠なものなのだなと感じると，遊びはどれほど重要なものなのかということを改めて感じることができました。

プリントの最後にあったように，保育を終えても保育者の仕事が終わったわけではなく，子どもたちの様子を報告しあったり，子どもたちについて話し合ったりということを知り，保育者としての仕事の深さを感じると同時に，保育は１日で終わらず，次の日次の日へとつながっていくということを知りました。保育者が子どもを理解することと同じぐらいに，保育者同士が理解し合うことも重要であると思います。一人で保育はできず，たくさんの大人でたくさんの子どもを支えていく姿勢が，必要だと感じました。

子どもたちから教えられること，考えさせられることは多くあると思います。これから，沢山の子どもたちとの関わりを大切にし，子どもたちとの関わりの中で，自分も学習し，考えを深めていきたいと思いました。

おわりに

ここまで読んだみなさんはすでに気づいたと思いますが，子どもたちの１日の生活は，いろいろな人や物と出会い，そしてそれらにいろいろ働きかけながら自分のイメージや思いなど，さまざまなものの絡み合いの中で遊びを生み出したり，展開したりしています。その遊びの中には，課題や目的に向かい，それに必要なものを選び出し，取り掛かるものから，名もつけられないような小さな遊びもありました。しかしその小さな遊びでも，その子どもにとっては，見たり聞いたり感じたりして大きく心を動かされるものであったり，手で触れたり握ったりして，その特性を肌で感じ取るものであったり，働きかけたそのものが変化することへの大きな感動や喜び，発見であったり，今まで出来なかったことが出来るようになったことの喜びであったり，自信につながるものであったりするものかもしれません。

幼児期の遊びは，幼児にとっては大切な学習です。そしてその遊びは，環境によって生み出されています。幼児期の発達にとっては，遊びによる経験がとても大切で，その経験が発達をとげる鍵を握っているといえます。しかし，その経験が「字」や「数」や「運動」などについて，トレーニングといった形による経験では，幼児の生活から遊離していて楽しいものではなく，幼児の発達に合わないものとなり，望ましい発達を遂げることには結びつきません。子どもたちが，あらゆることへ自ら主体的に取り組もうとするその生活ぶりそのものがいろいろな活動の基盤になっていくのです。こうしたことを考えると，「保育力のある保育士・幼稚園教諭」とは，子どもたち一人ひとりが興味・関心を向け，自分の考えで自分なりに，自分から遊びに取り組もうとする主体的な子どもたちの姿や意欲、心情を大切に受け止めることのできる保育者だといえるのではないでしょうか。

私は，「幼稚園での子どもたちの生活」を読んだ学生が，子どもの生活から遊離せず，子どもが興味・関心を向け，喜び，楽しんで取り組める遊びによる経験を重ねるうちに発達していくということを理解して欲しいと願っていました。３人の学生の書いた感想文を読むと，学生たちが，１日の保育記録から，幼稚園の生活の様子を追体験し，保育の準備，環境の整備，遊びの重要性，保育者の援助，保育後の保育の振り返りなど，保育の大切な部分をきちんと捉えていることがわかります。また学生たちは，これからの学習や将来に向けて，活かしていきたいといった希望も抱いていました。保育の実践事例を読み取り，理解し，考えるといった経験は―たとえそれが机上の学習にもかかわらず―学生にとって大きな力なっていくものだと感じさせられました。

みなさんは，どのような感想をもちましたか。みなさんが持った感想を是非，聞かせてほしいと思います。そして一緒に話し合いながら，子どものことについて学んでみませんか。これから将来に向かって，自分の進路をじっくり考えながら，楽しく，しっかりした大学生活を組み立てていって欲しいと願っています。

【参考文献】

現代保育実践研究会編『保育実践事例集』１「実践事例総論33（森上史朗）」（第一法規），pp.203～205

1　このほかにも，小学校教諭と中学校社会科教諭の免許が取得できます。

2　1947年７月発行『幼児の教育』第５号「学校教育法における幼稚園（一）」における新しくなった幼稚園の目的について述べた一節より。高杉自子，有賀和子編著『演習保育講座第4巻保育方法論』（光生社，1998），４頁。